

論文審査の結果の要旨および担当者

報告番号	※	第	号
------	---	---	---

氏名
論文題目

吉村愛子

日本人英語学習者の主観的困難点に対処する学習 e ポートフォリオの可能性
—紙/電子媒体の振り返りシートを活用して—
(Exploring the Possible Effectiveness of ePortfolio Platform in Dealing with
Japanese EFL Learners' Subjective Difficulties through the Use of Paper- based or
Electronic Reflection Sheets)

論文審査担当者
主査

	名古屋大学	教授	木下	徹
委員	名古屋大学	教授	内田	綾子
委員	名古屋大学	准教授	加藤	高志
委員	名古屋大学	准教授	佐藤	弘毅

論文審査の結果の要旨

I. 論文の構成と概要

本研究は、英語の資格試験対策講座を受講している大学レベルの日本人英語学習者が、聴解テスト及び読解テストに関して感じる主観的な困難点を、紙もしくは電子媒体による、自己省察と疑問点整理等のための「振り返りシート」を使用して把握すること、並びに、その主観的困難点に対処するための手段としてeポートフォリオ(プラットフォーム)を活用することの効果ないしは影響を、学習の進行による変化や媒体の違い等も考慮に入れて、質的、量的の両面から総合的に探求することを主な目的としている。

本研究は、序論である第1章から総括である第7章までの7つの章と参考文献等から構成されている。第1章では、序論として、本研究の背景、目的、及び研究課題を述べた後、本研究で使用した研究方法と、分析対象の英語資格試験対策講座としてのコースの概要を説明し、章の最後に、本論文の構成を概説している。なお、本研究で設定している研究課題は、第1章1.3節(5頁)から引用すると、以下の5つである。

- (1) 資格試験対策講座に学ぶ日本人英語学習者の主観的困難点にはどのようなものがあるか
- (2) 資格試験対策講座に学ぶ日本人英語学習者の主観的困難点に関わる変化にはどのようなものがあるか
- (3) eポートフォリオの活用は、振り返りシート媒体が電子であろうと紙であろうと、資格試験対策講座に学ぶ日本人英語学習者にとってスコアの伸びの見地から有効か
- (4) 振り返りシートを紙媒体にするか電子にするかで、テストスコアの維持・向上に差異はあるか
- (5) 研究課題1から4を踏まえて、ポートフォリオを活用して学習者の主観的困難点に焦点を当てる事の意義・影響を総合的に検討する

このような、研究課題を想定して、続く第2章では、本研究の主要な要素である、学習者の主観的困難点とポートフォリオに関する先行研究を概観している。本章では、前半で、主観的困難点について、客観的困難点とも関連させつつ本研究での定義を記述し、主要な先行研究を概括した後、主観的困難点を取り上げる意義についても説明している。また、本章後半では、本研究のもう一つの主要要素であるポートフォリオについても、その定義と種類、その出現にいたる教育・学習観の変遷、さらには、語学教育での使用例等も含めて解説している。

第3章は、学習者によりポートフォリオ中で報告された主観的困難点についての質的研究の章で、前半では、対象となった対象コースの内容、実験参加者とデータの採取の時期と範囲、およびトライアングレーションを含むデータ分析等の方法論を論述している。後半では、第1章で提示した研究課題1に関する主観的困難点の分類、並びに、研究課題2に関する先述した困難点の学習プロセスにおける変化についての結果を記述し、考察を加えている。さらに、研究課題2についてはフォローアップインタビューの結果によって補完している。これらを通じて得られた知見の1つとして、学習者の主観的困難点としては、語彙、文法、テスト課題取り組み方略等に関する未習得感、テスト実践時

論文審査の結果の要旨

の時間制限、集中力維持、新形式のテスト問題への対応、聴解力・読解力の能力不足といった事項への不安感等、15種類の困難点が把握されたとしている。さらに、受講の進展に伴い、当初多く報告された各種の未習得感の既習得感への転換、困難点記述における曖昧性の減少と具体性の増加、自己評価スキルにおける自信の増大、主観的困難点解決のための目標の違い等を含む、16種類の主観的困難点に関する変化がみられたとしている。

続く第4章では、研究課題3と1について、eポートフォリオの使用と客観的テストにおける得点の伸びに関して、量的側面から研究方法、結果、考察について論述している。具体的には、準備された資料へのアクセス回数によりアクセス上位群と下位群を設定し、マンホイットニー検定を用いて比較したところ、振り返りシートの媒体が紙であっても電子であっても、それぞれ上位群は下位群より、得点の伸びが有意に大きくポートフォリオの活用は有効であることが示唆されたとしている。

同様に第5章では、研究課題2と4に関して、紙と電子という、振り返りシートの媒体の違いがシート活用や学習に及ぼす影響を、主として3元配置ANOVAを用いて量的に解析している。それによると、参考資料へのアクセス回数の上位群に限定した場合、両者ともテスト得点は学習後期に有意に高まった一方、得点の向上は、電子媒体による群の方が、紙媒体群よりも、より大きかったとしている。

以上のような結果を踏まえて、第6章では、第3章、4章、5章で詳述した質的側面と量的側面からの結果と考察を統合して、ポートフォリオの効果と電子媒体の優位性に関する理由も含めて、研究課題に関する総合的考察を加えている。さらに、同章では、主観的困難点に対処するための手段としてeポートフォリオを活用する学習モデルも提案している。最後に第7章は研究を総括した後、教育的示唆、本研究の限界と今後の展望についても記述している。

II 評価

本論考について、積極的に評価すべき点として以下の諸点を挙げるができる。

(1)近年、学習者評価の点のみならず、教授・学習の方法としても、ますます重要視されてきているポートフォリオについて、緻密な研究計画を立案・実行し、質的研究方法・量的研究方法、関連する主観的データと客観的データ等をバランスよく駆使し、研究課題を総合的に検証し、それぞれ単独の研究方法やデータの種類ではなし得ない形で、全体として説得力のある論を構築している。

(2)質的研究では、サンプル数が少なくなりがちであるが、本研究では、多数の実験参加者を対象としている。また、質的データの整理と範疇化についても定評のある技法に依拠して、整合性のある把握をしている。さらに、「振り返りシート」、参与観察、インタビュー等の複数ソースにより、データの重厚な記述と知見のトライアングレーションにも相当成功している。

(3)量的側面では、2元配置の場合と比較して格段に複雑になる3元配置の分散分析の解析と結果の解釈を、大筋で遺漏なく遂行している。さらに、分散分析の前提からの逸脱の可能性に対しても、セルサイズの均一化の他、適宜、ノンパラメトリック検定を補足的に用いるなど、十分な配慮をしている。

論文審査の結果の要旨

(4) 研究課題について得られた知見の1つとして、主観的困難点については、6種類のパターンコードで分類され、「語彙」、「文法」、「(課題遂行)方略」、「促進的不安」、「集中力」等15種類に分類することで、その全体像を提示している。

(5) さらに、上述したような、主観的困難点が、学習の進行に伴い、「(語彙、文法、方略その他の項目における)未習得感から既習得感へ」、「困難点の認識とその改善のための目標における曖昧性から具体性へ」、「自己評価スキルの向上」といった変化を示すことを報告している。

(6) また、ポートフォリオを使用すること自体の有効性と、「振り返りシート」における紙と電子という媒体の差における電子媒体の優位性を、客観的なテストスコアで裏打ちする形で提示し、その理由に関しても有力な考察を展開している。

以上のような、評価すべき点を有する本研究であるが、以下の様な、改善の余地があると思われる点も存在する。

(1) 資格試験対応資料へのアクセスについて、アクセス回数を主な指標としているが、アクセス時間や、PC対スマートフォンといったアクセスルートの違いといった観点からも検討することが望まれる。

(2) 本研究で報告されている学習者の自律性の向上に関して、対象講座の内容に直結しない分野や、修了後の中長期な視点からの検証も望まれる。

(3) 参与観察は本研究や類似の質的研究法としては極めて重要な方法であるが、研究結果の一層の一般化の観点からは、研究者とデータ収集者の分離の可能性も将来的には考慮すべきである。

(4) 学習者の集団としての傾向のみならず、個人差についても、さらに積極的に分析の対象とできるような方法論的発展も望まれる。

以上のような一層の向上が望まれる点はあるが、それらは本論文の価値を著しく損ねるというものではない。その一部は筆者も本研究の限界として自覚しており、今後の改善も期待できる。

III 評価結果の判定

本報告書の冒頭に記した4名からなる審査委員会は、2021年1月22日に、公開口述試験を行い、その後の合議の結果、上記のような理由から、本研究は博士の学位を認定すべき水準に十分達していると判断した。